

不安静穏化機能尺度の開発 — 因子構造、信頼性、妥当性の検討 —

北星学園大学 香川大学
田澤安弘 橋本忠行

◆ 要約 ◆

本研究の目的は、社会文化的な理論に基づいた不安静穏化機能を取り上げ、測定尺度を構成するとともに、その特徴を明らかにすることである。調査への回答に同意の得られた大学生 218 人を対象にして、質問紙調査を行った。探索的因子分析の結果、不安静穏化機能尺度は、「セルフトークによる静穏化」因子、「自動的静穏化」因子、「心内化された肯定的な声」因子からなる 3 因子によって構成されることが明らかになった。各因子の α 係数は $\alpha = .833 \sim .854$ 、階層因子分析による双因子モデルの適合度は $GFI = .904$ 、 $AGFI = .861$ 、 $CFI = .945$ 、 $RMSEA = .060$ であり、信頼性・妥当性とも十分な値が得られた。また、下位尺度得点と総合得点は、STAI の特性不安及び状態不安との間に負の相関関係が ($r = -.22 \sim -.47$)、不安コントロール感尺度との間に正の相関関係が認められると同時に ($r = .22 \sim .34$)、複数のレジリエンス要因から影響を受けることが確認された ($\beta = .164 \sim .379$)。

キーワード：不安静穏化機能、社会文化的理論、発達最近接領域、信頼性、妥当性

I 問題と目的

われわれはこれまで、教育学の領域で実践されている「ダイナミック・アセスメント (Dynamic Assessment)」(以下 DA) (Lidz & Elliott, 2007) を臨床心理学の領域に、具体的には心理カウンセリングのインターク面接に導入してきた (田澤・近田, 2018)。それによって一定の成果もあり、インターク面接の前後に測定されたクライアントの状態不安の変化が、その後導入されたブリーフセラピーによる特性不安の短期的・中期的な変化と関連することが見出されている (田澤・近田, 2017; 田澤・本田, 2017)。

DA は Vygotsky (1933) の「発達の最近接領

域 (zone of proximal development)」(以下 ZPD) の理論を取り入れた、教授・学習過程の変化に関する学習者と教師の協働的評価法であり、事前テスト→介入→事後テストの形式で行われる。介入による学習者の変化、つまり測定値の前後差が ZPD であると考えられ、それは「まだ成熟してはいないが成熟中の過程にある機能、今はまだ萌芽状態にあるけれども明日には成熟するような機能を規定」すると説明されている (Vygotsky, 1933)。

われわれは、これまで知的能力や認知機能の領域に限定して使用されてきた ZPD に対して、Wells (1999) のように感情を導入して概念的拡張をはかり、不安の DA を行ってきた。しか

し、伸びしろとしてのZPDは本来であれば感情そのものではなくそれに関連する精神機能や能力に関わるものであり、測定や予測の対象となるべきなのは不安ではなく、不安を静穏化する自己調整機能であると考えられる。

自分自身に話しかけるセルフトークによる自己調整機能を測定する尺度は、海外にはいくつも存在しているが、Vygotskyのような社会文化的な理論を取り入れたものは少ない。たとえば、Calvete et al. (2005)は認知療法の自動思考の考え方をもとにSelf-Talk Inventoryを、Siegrist (1995)はDuval & Wicklund (1972)の自己覚知理論などからInner Speech Questionnaireを、Brinthaup et al. (2009)はCarver & Scheire (1998)のメタ・モニタリングなどの多様な理論を背景にSelf Talk Scaleを開発し、Uttel et al. (2011)はそれらの尺度間に相関関係が認められたことを報告している。一方、Vygotskyの理論を取り入れたものとしては、Duncan & Cheyne (1999)のSelf-Verbalization Questionnaireがある。これは、“I sometimes verbalize my thoughts when I'm working on a difficult problem”のように、思考を外言化することで自分の行動を調整する程度を測定する。また、日本のセルフトーク研究は、アスリートに関するものが多い。たとえば有富・外山 (2017)は、競技中に生じる不安に対処するためのセルフトーク（「どんだんいこう」など）として機能する「促進的教示」などを測定する、スポーツ競技自動思考尺度を作成している。

このように、臨床現場において不安を静穏化する機能のDAを今後さらに発展させるためには、社会文化的な理論と整合し、ZPDと関連づけることのできる尺度を新たに作成することが不可欠である。このような訳で、本論では社会文化的な理論を取り入れ、不安静穏化機能を「発達の過程で精神間における他者との社会的関わりを通して心内化されたもので、ストレス状況など何らかの要因で昂じた不安を精神内において静穏な方向へと自己調整する機能」と定

義し、その測定を目的とした尺度を開発したい。

この尺度は、人格の否定的側面や精神病理ではなく、不安静穏化という精神機能の肯定的側面に着目した尺度である。その意味で、今後ヒューマニスティックな心理アセスメントの発展に寄与することが期待される。加えて、社会文化的なアプローチは、人間性心理学にとって益するところが大きいと考えられる。たとえば、ヒューマニスティックな神経心理学の領域では、自己感に関して、発達的に出現する自己に対してエネルギーの流れや情報を調節する脳の働きに根ざす、感情、知覚、行動が統合されたホリスティックなユニットであるとする、Vygotsky (1925)やLuria (2005)の影響が及んでいる (Robbins & Gordon, 2015)。また、クライアントがみずからの体験に触れて深めていくヒューマニスティックな臨床的アプローチの領域では、Vygotskyが多くの著作の中で言及している「心的体験 (perezhivaniye)」という概念をVasiluk (1992)が適用し、Gendlin (1982)の体験過程論を踏まえつつ、体験を一般化・抽象化しようとする試みを行っている (森岡, 2012)。さらに、社会文化的アプローチの一種であり、「多声性 (multivoicedness)」や「多数学性 (multiplicity)」が特徴のBakhtinの社会的言語論 (Emerson & Holquist, 1986)は、人間の数だけ現実世界が存在するというRogers (1978)の多元的な世界観と類似しているだけでなく、体験過程的な視点から超自我を「声」と呼んだり、クライアントの内側にいる人を「その中にいる人 (the person in there)」と呼ぶGendlin (1996)にも類似しており、Cooper & McLeod (2011)の多元的心理療法論やRowan & Cooper (1999)の多元的自己論などに影響を及ぼしている。

II 方法

1 質問項目の作成

尺度の質問項目は、筆頭著者と臨床歴25年

以上の臨床心理士の2人で作成した。あらかじめ想定された三つの構成概念に合致すると思われる文章を協議しながら多数考案し、最終的に40項目に絞り込んだ。一つ目は、認知行動療法の分野ではMeichenbaum (1977)の自己教示訓練にも取り入れられているが、Vygotsky (1934)やLuria (1961)が論じているセルフトークによる自己調整機能である。二つ目は、発達の過程において母-子間の情緒的交流のような精神間で社会的に形成された不安静穏化機能が心内化して、精神内で自動的に発動するようになる自己調整機能 (Schore, 1994)である。三つ目は、Bakhtin (1963)の「ポリフォニー論」に顕著に認められるものであるが、セルフトークによる内的対話を促進するような、心内化して自己に働きかける他者たちの声である。

2 質問紙の構成

不安静穏化機能尺度 (Anxiety-Soothing Function scale[ASF])：ASFのオリジナル試作版は、40項目から構成されている。教示文を「あなたが普段どう感じているのか、最もよくあてはまる数字を○で囲んでください」とし、「全くあてはまらない (1)」「あまりあてはまらない (2)」「どちらとも言えない (3)」「ややあてはまる (4)」「非常にあてはまる (5)」の5件法で回答を求めた。

二次元レジリエンス要因尺度 (Bidimensional Resilience Scale[BRS])：平野 (2010)の作成したBRSを用いた。これは「資質的レジリエンス要因」と「獲得的レジリエンス要因」を測定する尺度であり、前者が「楽観性」、「統御力」、「社交性」、「行動力」の4因子、全12項目から、後者が「問題解決志向」、「自己理解」、「他者心理の理解」の3因子、全9項目からそれぞれ構成されている。1～5の5件法で回答を求めた。

新版STAI状態-特性不安検査 (State-Trait Anxiety Inventory-JYZ[STAI])：肥田野ら (2000)の作成したSTAIを用いた。これは「状態不安」

および「特性不安」を測定する尺度であり、いずれも1因子、20項目から構成されている。1～4の4件法で回答を求めた。

不安のコントロール感尺度 (Perceived Anxiety Control scale[PAC])：城月ら (2013)の作成したPACを用いた。これは不安のコントロール感を測定する尺度であり、「回避」、「冷静」、「願望」の3因子、全14項目から構成されている。1～5の5件法で回答を求めた。

3 実施の手続き

X年Y月に、札幌市内の私立大学に通う学生252人を対象に質問紙調査を行った。調査はわれわれ以外の教員が担当する科目の授業時間に実施し、即時回収した。実施には20分程度を要した。白紙による回答および欠損値のあるデータ34人分を全て除外すると、有効回答は218人 (男性102人、女性116人)、平均年齢は18.53±0.86歳であった。

4 倫理的配慮

質問紙配布時に、調査の目的等を説明して無記名による協力を求めた。調査への協力は自由意志によるものであることを期待し、協力の意志がない場合には白紙で提出してもよいこと、白紙でも不利益を被ることが一切ないことを説明した。また、データは数年以内に論文化される予定であるが、研究目的以外には使用されないこと、厳重に保管されること、結果が公表されてから5年の保管期間を経て適切な方法で処分されることを保証した。

5 分析の手続き

まず、質問項目を外的基準による基準関連的方法によって選定してから、探索的因子分析によって質問項目の抽出と因子構造の確定を行った。その後、尺度としての信頼性、妥当性、カットオフ値の検討を行った。統計解析は、カットオフ値に関してはEZR (Kanda, 2013)を、階層因子分析に関してはAmos (version25.0.0)

を、その他に関してはSPSS (version23.0.0.0)を使用した。

III 結果

1 項目分析

(1) 基準関連的方法

STAIの特性不安得点が70パーセント以上(段階4と段階5)であり、なおかつBRSの資質的レジリエンス要因と獲得的レジリエンス要因を合算した総合得点が65点以下である34人を抽出し、これを基準群とした。対照群は

STAIの特性不安得点が69パーセント以下(段階3以下)であり、なおかつBRSの総合得点が81点以上である36人を抽出した。いずれも、30人程度を目安としたものである。そして、ASFの各質問項目の素点を従属変数とするt検定を行った結果、基準群と対照群の間に有意差が認められなかった8項目を除外した。なお、質問項目の選定に際しては、分布の偏りではなく対照群との識別力を重視したために、天井効果および床効果については検討しなかった。項目分析に特性不安得点を利用したのは不安に対する識別力を高めるためであるが、

表1 ASFの基本統計量、因子間相関(尺度得点による)

	平均値(±SD)	因子間相関	第2因子	第3因子	総合得点
第1因子	17.56 ± 4.85		.445	.553	.845
第2因子	18.11 ± 4.10			.375	.729
第3因子	17.83 ± 4.89				.821
総合得点	53.49 ± 11.10				

N=218 (男性102人、女性116人)

表2 不安静穏化機能尺度の因子分析(主因子法、プロマックス回転)の結果

	因子1	因子2	因子3
セルフトークによる静穏化 ($\alpha = .854$)			
気持ちがあせっても、大丈夫だよと自分をなだめることができる。	.881	-.009	-.149
心が揺れて不安定になると、自分を落ち着かせる言葉が自然に思い浮かぶ。	.771	-.037	-.018
動揺して心臓が動悸を打っても、心の中でリラックスする言葉を繰り返すことができる。	.757	-.048	.102
心配事があっても、心の中で安心する言葉をつぶやくことができる。	.651	.168	-.042
緊張して呼吸がはやくなくても、リラックスする言葉を自分にかけながら深呼吸することができる。	.577	.032	-.002
つらくても、自分になぐさめの言葉をかけて乗り越えることができる。	.523	.003	.110
自動的静穏化 ($\alpha = .847$)			
ムッとすることが起こっても、しばらくすると気持ちが自然と切り替わっている。	.017	.777	-.024
気分が落ち込むような出来事が起こっても、しばらくして気がつくまで回復している。	-.039	.761	.057
気分が高ぶったとしても、時間がたてば自然に落ち着いている。	-.075	.736	.024
気持ちが傷ついたとしても、時間がたてば元気になれる。	.116	.690	-.010
どんなに気分が落ち込んだとしても、2~3日あれば元気を取り戻すことができる。	.058	.600	.021
心内化された肯定的な声 ($\alpha = .833$)			
これまでお世話になった人たちが、心の中で温かく見守っているような感じがする。	-.142	.014	.789
生きていることがつらくても、私の内面には自分を支えてくれる人たちの励ましの声が響いている。	.071	-.076	.764
私の内面には、心あたたまる人たちの声が響いている。	-.106	.048	.644
私の心の中には、力を与えてくれるような優しい声が響いている。	.302	-.066	.604
私の心の中には、まるで安全感を与える誰かが存在しているかのようで、それによってしっかりと守られている感じがする。	.118	.016	.601
私はこれまで出会った人たちに勇気と愛情を与えられ、それによって生かされている。	-.032	.145	.499

それに加えてレジリエンス要因を利用したのは、ネガティブな感情を減弱する感情調整ストラテジーとレジリエンスとの関連性が指摘されているからである(Kay, 2016)。

(2) 探索的因子分析

残りの32項目について探索的因子分析を行った。因子数は、固有値の減衰状態および解釈可能性より4因子構造が妥当であると判断し、主因子法プロマックス回転を用いて因子分析を行った後、因子負荷量が.40に満たない6項目を削除した上で再度同様の分析を行い、4因子構造が見出された。しかし、第4因子のみその他の因子との相関係数が負の値となり、内容的にも不安静穏化とは異質な否定的思考を反映するようなものであったため、この因子の4項目を全て削除して改めて3因子構造を想定した因子分析を行った。そして、因子負荷量が.40に満たない5項目を削除した上で再度同様の分析を行った結果、3因子構造が見出された。基本統計量と因子間相関は表1に、因子分析の結果は表2に、それぞれ示した。なお、全ての下位尺度得点と総合得点の平均値に男女差はなかった。

第1因子は、「気持ちがあせっても、大丈夫だよと自分をなだめることができる」など、不安を低減して自己調整をはかるために精神内で自分自身に話しかけるセルフトークを反映した6項目によって構成されており、「セルフトークによる静穏化」因子と命名した。第2因子は、「気分が落ち込むような出来事が起こっても、しばらくして気がつくまで回復している」など、本人の意志的な努力なしに自動的に感情調整が行われることを反映した5項目によって構成されており、「自動的静穏化」因子と命名した。第3因子は、「私の内面には、心あたたまる人たちの声が響いている」など、生きていくうえでの根本的な安心感・安全感を与えるような心内化された肯定的他者たちの声を反映した6項目によって構成されており、「心内化された肯定的な声」因子と命名した。

2 信頼性の検討

内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、第1因子で $\alpha = .854$ 、第2因子で $\alpha = .847$ 、第3因子で $\alpha = .833$ であった。また、尺度全体では $\alpha = .894$ であり、十分な値が得られた。

3 妥当性の検討

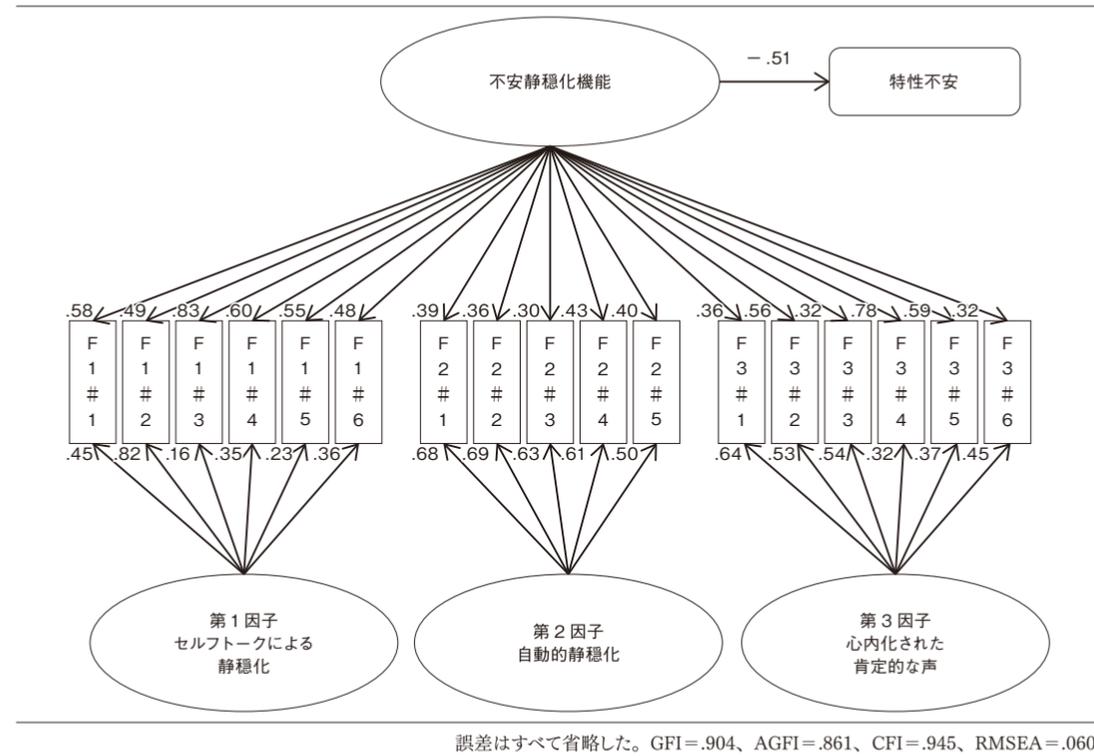
(1) 階層因子分析

構成概念妥当性、すなわち3因子構造になること、三つの因子と一般因子から該当する質問項目がそれぞれ影響を受けること、不安静穏化機能から不安が影響を受けることを確認するために、観測変数としての質問項目、全ての観測変数を説明する一般因子、一部の観測変数を説明するグループ因子、外的変数としてのSTAIの特性不安得点を投入する二層の階層因子分析を行った。その結果、GFI=.904、AGFI=.861、CFI=.945、RMSEA=.060であり、ほぼ十分なモデル適合度が示された(図)。一般因子とグループ因子は該当する全ての質問項目に対して正の有意なパスを示し、一般因子は特性不安に対して負の有意なパスを示していた。この結果から、ASFには二層の双因子モデルが適合し、観測変数として用いた全ての質問項目が三つのグループ因子と一般因子によって説明されること、一般因子としての不安静穏化機能が特性不安に対して負の影響を及ぼすことが確認された。

(2) 相関分析

基準関連妥当性を検討するために、STAIの「特性不安」及び「状態不安」、PACの総合得点及び各下位尺度得点との相関係数を算出した(表3)。

STAIの「特性不安」との間には、ASFの総合得点と第2因子の間に中程度の負の相関が($p < .01$)、第1因子と第3因子の間に弱い負の相関が($p < .01$)、「状態不安」との間には、第2因子との間に中程度の負の相関が($p < .01$)、総合得点、第1因子及び第3因子との間に弱い



誤差はすべて省略した。GFI=.904、AGFI=.861、CFI=.945、RMSEA=.060

図 不安静穏化機能尺度の階層因子分析

表3 ASF、STAI、PACの相関

	特性不安	状態不安	総合得点 (PAC)	回避 (PAC)	冷静 (PAC)	願望 (PAC)
第1因子	-.348**	-.238**	.332**	.289**	.373**	.041
第2因子	-.417**	-.469**	.253**	.235**	.312**	-.045
第3因子	-.331**	-.217**	.223**	.256**	.200**	-.021
総合得点	-.452*	-.373**	.337**	.326**	.366**	-.008

**p<.01

負の相関が (p<.01)、それぞれ認められた。

PACの総合得点、「回避」、「冷静」との間には、ASFの総合得点及び全ての因子間にそれぞれ弱い正の相関が認められたが (p<.01)、「願望」との間には認められなかった。

(3) 重回帰分析

さらに基準関連妥当性を確認するために、ASFを目的変数、BRSを説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った (表4)。その結果、第1因子はBRSの「楽観性」(p<.001)、「統御力」(p<.001)、「問題解決志向」(p

<.01)によって、第2因子は「楽観性」(p<.001)、「他者心理の理解」(p<.01)によって、第3因子は「社交性」(p<.05)、「行動力」(p<.001)、「他者心理の理解」(p<.01)によって、総合得点は「楽観性」(p<.001)、「統御力」(p<.001)、「問題解決志向」(p<.01)、「他者心理の理解」(p<.01)によって、それぞれ説明されることが示された。

4 カットオフ値の検討

カットオフ値を決定するために、高不安に対

表4 BRSによるASFの重回帰分析

	レジリエンス要因							Adjusted R ²
	楽観性	統御力	社交性	行動力	問題解決志向	自己理解	他者心理の理解	
	β	β	β	β	β	β	β	
第1因子	.225***	.336***			.167**			.304*
	.416**	.475**	.254**	.372**	.361**	.128	.262**	
第2因子	.379***							.204***
	.415**	.286**	.272**	.221**	.311**	.121	.270**	
第3因子			.165*	.295***				.226**
	.213**	.378**	.313**	.393**	.315**	.030	.340**	
総合得点	.225***	.290***			.164**			.354***
	.429**	.480**	.349**	.417**	.411**	.114	.364**	

***p<.001, **p<.01, *p<.05, Adjusted R²: 調整済み決定係数, β: 標準偏回帰係数, r: 相関係数

表5 正確度の各種指標

総合得点の閾値	52
特異度	0.562
感度	0.941
AUC(95% CI)	0.816(0.715-0.917)
陽性的中率	13.9%
陰性的中率	99.2%
陽性結果の尤度比	2.15
陰性結果の尤度比	0.11

特性不安得点を93パーセンタイル以上に設定

するASFの識別能や予測能など各種の正確度の検討を行った (表5)。ASFの総合得点によって、STAIの特性不安得点が93パーセンタイル以上である高不安の協力者を識別し得るようになり、ROC (受信者動作特性試験) 曲線を用いて感度と特異度の和が最大になる閾値を求めた。その結果、総合得点の閾値は素点で52点 (以下) となり、感度が0.941、特異度が0.562、AUC (ROC曲線下面積) が0.816と示された。さらに、総合得点による特性不安得点的中率は、93パーセンタイル以上の高不安者に対応するようにテスト前確率 (有病率) を7%、感度を0.94、特異度を0.56として解析すると、陽性的中率が13.9%、陰性的中率が99.2%と示された。陽性結果の尤度比は2.15、陰性結果の尤度比は0.11であった。

IV 考察

1 信頼性と構成概念妥当性

探索的因子分析を行ったところASFは最初4因子に収束したが、質問項目作成の段階で想定していた三つの構成概念とは異なる1因子が見出されたため、それを削除して再度因子分析を行った結果として3因子構造になった。試行錯誤的な確定であったが、各信頼性係数は一定の基準を満たしており、十分な内的整合性が確認された。また、階層因子分析を行ったところ、該当する質問項目が一般因子とグループ因子により説明される二層の双因子モデルが適合した上に、特性不安が一般因子によって影響を受けることが理解された。よって、尺度全体が測定する構成概念とそれが不安に及ぼす直接的影響が明確化されたことにより、不安静穏化機能と呼び得る構成概念の妥当性が確認された。

しかし、図に示したが、グループ因子のパス係数の値が一般因子のそれより大きい質問項目が、第1因子では1/6個、第2因子では5/5個、第3因子では3/6個ある。これは、相対的にその質問項目が、尺度全体によって測定される構成概念の影響よりもグループ因子固有の影響を反映していることを意味する。この点は、構成概念妥当性の構造的側面として望ましくないと

されており(坂本, 2015)、ASFのひとつの限界になるであろう。

2 基準関連妥当性

(1) STAIとの関連性

STAIの特性不安と中程度の負の相関が認められたのは、ASFの総合得点と第2因子だけであった。一般因子としての不安静穏化機能が低いほど特性不安が低いことが認められたので、双因子モデルに照らすと、尺度としての基準関連妥当性が確認されたと言えるであろう。ただし、第1因子と第3因子に十分な相関が認められなかったことは尺度の性格から言って不自然なことであるので、今後さらに不安との関連性を検討する必要がある。以上の結果を踏まえると、ASFで測定される不安静穏化機能は、現時点では各下位尺度を合計した総合得点に用いて用いることが有用であると考えられる。

また、状態不安は双因子モデルには組み込まれていないが、第2因子との間にのみ中程度の負の相関が認められ、「自動的静穏化」機能が低いほど状態不安が低いことが理解された。今回測定された状態不安は、大学の授業時間内に調査目的で質問紙が配布されたときのものである。今後、不安喚起場面を実験的に設定するなどして、状態不安の高低とASFの総合得点及び各下位尺度との関連性について精査する必要があるように思われる。

(2) PACとの関連性

ASFの総合得点及び各下位尺度と、PACの総合得点、「回避」、「冷静」との間にそれぞれ弱い正の相関が認められたが、「願望」との間には認められなかった。いずれにせよこの結果から、ASFとPACは、不安をコントロールする自己調整機能としては質的に異なる領域を測定するものと考えられる。おそらく不安に対する対処行動それ自体と、不安のコントロール感という対処行動への評価、という違いがあるのだろう。今後、PAC以外の感情調整系尺度との関連性について、改めて検討する必要がある。

(3) BRSとの関連性

ASFを目的変数、BRSを説明変数として重回帰分析を行ったところ、ASFの総合得点と全ての下位尺度について、レジリエンス要因による影響が確認された。決定係数の数値が十分ではないので(調整済みR²=.204~.354)、予測を目的としてβを使用することはできないが、BRSがASFに及ぼす影響の検討を目的とした使用は可能である。

第1因子の「セルフトークによる静穏化」は、BRSの「統御力」、「楽観性」、「問題解決志向」の順に影響の度合いが高いことが確認された。因子負荷量が一番高い項目である「気持ちがあせっても、大丈夫だよと自分をなだめることができる」を例にとると、自分を統御する力、楽観的な姿勢、そして問題を積極的に解決しようとする意志が背景にあって、不安が喚起されると、「大丈夫だよ」という自分をなだめるためのセルフトークに対して促進的な影響を及ぼすようである。

第2因子の「自動的静穏化」は、BRSの「楽観性」、「他者心理の理解」の順に影響の度合いが高いことが確認された。不安の静穏化が自動的に行われるとすれば、一見してそこには何も生じていないように感じられるのかもしれないが、自動的であることの背景には楽観的姿勢や他者に対する理解及び受容があって、それらの影響が及んでいるようである。

第3因子の「心内化された肯定的な声」は、BRSの「行動力」、「他者心理の理解」、「社交性」の順に影響の度合いが高いことが確認された。しかし、今回はその他の因子と合わせてこの因子も目的変数として検討したものの、因果性の方向が真逆になる可能性も否定できない。つまり、心内化された声に支えられることによって、社交性や行動力が促進されると考えるのが自然であるように思われるのである。これも今後の検討課題としたい。

最後に、総合得点についてである。この総合得点は、BRSの「統御力」、「楽観性」、「他者

心理の理解」「問題解決志向」の順に影響の度合いが高いことが確認された。心理的な傷つきから立ち直る回復力として、「統御力」と「楽観性」は資質的レジリエンス要因、「他者心理の理解」と「問題解決志向」は獲得的レジリエンス要因に含まれる。その意味で、総合得点は資質的及び獲得的レジリエンス要因の双方から影響を受けるものの、どちらかと言えば後天的に身につけていきやすい獲得的な要因よりも、持って生まれた気質と関連の強い資質的な要因の影響を受けると言えるのかもしれない。

3 カットオフ値

臨床検査としての基準範囲は、一般的に健常者の95%が入る測定値の区間として設定され、それが測定値の位置づけを、つまり健常か否かを判断する基準になる。この場合には、尺度自体のt得点やパーセンタイルなどの内的基準が使用される。これに対して臨床判断値は、特定の病理の診断などに関して、測定値を用いて判定する際の基準となる。カットオフ値は、臨床判断値の中では診断閾値として理解される値である。本論では、性格特性的な不安に対する識別能を重視したために、不安静穏化機能それ自体の基準範囲ではなく、特性不安の測定値を外的基準とする臨床判断値を求めることにした。

ASFの総合得点のカットオフ値は、数量的な意味で臨床的介入の対象となるであろう特性不安得点93パーセンタイル以上の協力者を識別するポイントを検討し、結果としてその閾値は52点となった。診断学的な確定診断と除外診断の視点からこの尺度の診断特性を判断すると、感度0.941、陰性結果の尤度比0.11、陰性的中率99.2%という数値からは除外診断において極めて有用であるものの、特異度0.562、陽性結果の尤度比2.15、陽性的中率13.9%という数値からは確定診断のために使用することはできないことが理解される。つまり、カットオフ値を52点(以下)に設定しても高不安者を識別するには実用的ではないが、52点(以上)

の場合には高不安がないことを識別するために、あるいは非高不安者を識別するために非常に有用であるということである。結論として、ASFの総合得点が52点以上の場合には不安静穏化機能が十分に働いており、極端に高い不安の存在が否定される可能性が強いと言えるであろう。

V おわりに

本研究の目的は、社会文化的な理論と整合する不安静穏化機能を測定する尺度を作成することであった。結果として、因子構造、信頼性、妥当性が明らかになり、診断学的には高不安者の除外診断に関わる識別能に優れた、一定水準の精度を持つ尺度が構成された。

今後の課題としては、まず基準関連妥当性の再吟味を行う必要がある。その他にも、交差妥当性、弁別妥当性、再検査信頼性、因子ごとの構成概念妥当性の検討や、ZPDの測定結果に基づく変化の予測可能性の検討など、順次行っていくつもりである。

付記

質問項目のオリジナル試作版を作成する段階で、トボス心理療法オフィスの近田佳江先生の協力を得た。厚くお礼申し上げます。また、調査のためにお世話になった北星学園大学非常勤講師渡辺舞先生と、ご協力いただいた学生の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

文献

- 有富公教・外山美樹(2017): スポーツ競技自動思考尺度の作成および妥当性の検討—競技中に生じる思考の個人差の理解に向けて。スポーツ心理学研究, 44(2), 105-116.
- Bakhtin, M.M. (1963): *Problemy poetiki Dostoevskogo*. Sovetskij Pisatel. 望月哲男・鈴木淳一(訳)(1995): ドストエフスキーの詩学 ちくま学芸文庫.
- Brinthaupt, T.M., Hein, M.B., & Kramer, T.E. (2009): The self-talk scale: Development, factor analysis, and

- validation. *Journal of Personality Assessment*, **91**(1), 82-92.
- Calvete, E., Estévez, A., Landín, C., Martínez, Y., Cardeñoso, O., Villardón, L., & Villa, A. (2005): Self-talk and affective problems in college students: Valence of thinking and cognitive content specificity. *The Spanish Journal of Psychology*, **8**(1), 56-67.
- Carver, C.S., & Scheier, M.F. (1998): *On the Self-Regulation of Behavior*. New York: Cambridge University Press.
- Cooper, M., & McLeod, J. (2011): *Pluralistic Counselling and Psychotherapy*. Los Angeles: Sage.
- Duncan, R.M., & Cheyne, J.A. (1999): Incidence and functions of self-reported private speech in young adults: A self-verbalization questionnaire. *Canadian Journal of Behavioral Science*, **31**(2), 133-136.
- Duval, S., & Wicklund, R.A. (1972): *A Theory of Objective Self-Awareness*. New York: Academic Press.
- Emerson, C., & Holquist, M. (Ed.) (1986): *Speech Genres and Other Late Essays: M.M.Bakhtin*. Austin: The University of Texas Press.
- Gendlin, E.T. (1982): *Experiencing and the Creation of Meaning: A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective*. New York: Glencoe Free Press.
- Gendlin, E.T. (1996): *Focusing-Oriented Psychotherapy: A Manual of the Experiential Method*. New York: Guilford Press.
- 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・Spielberger, C.D. (2000): 新版 STAI マニュアル 実務教育出版.
- 平野真理 (2010): レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成 パーソナリティ研究 **19**(2), 94-106.
- Kanda, Y. (2013): Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics. *Bone Marrow Transplantation*, **48**, 452-458. doi: 10.1038/bmt.2012.244 ; published online 3 December 2012.
- Kay, S.A. (2016): Emotion Regulation and Resilience: Overlooked Connections. *Industrial and Organizational Psychology*, **9**, 411-415. doi: 10.1017/iop.2016.31
- Lidz, C.S., & Elliott, J.G. (2007): *Dynamic Assessment: Prevailing Models and Applications*. Greenwich: JAI Press.
- Luria, A.R. (1961): *The Role of Speech in the Regulation of Normal and Abnormal Behavior*. Oxford: Pergamon Press. 松野豊 (訳) (1969): 言語と精神発達 明治図書.
- Luria, A.R. (2005): *Autobiography of Alexander Luria: A Dialogue with the Making of Mind*. Mahwah: Lawrence Erlbaum.
- Meichenbaum, D. (1977): *Cognitive Behavior Modification: An Integrative Approach*. New York: Plenum Press. 根建金男 (監訳) (1992): 認知行動療法: 心理療法の新しい展開 同朋舎出版.
- 森岡正芳 (2012): 欧州における潮流—およびロシアの動向 日本人間性心理学会 (編) 人間性心理学ハンドブック 創元社 194-201.
- Robbins, B.D., & Gordon, S. (2015): *Humanistic Neuropsychology: The Implications of Neurophenomenology for Psychology*. In Schneider, K.J., Pierson, J.F., & Bugental, J.F.T. (Ed.), *The Handbook of Humanistic Psychology: Theory, Research, and Practice* (Second edition). Los Angeles: Sage. 195-211.
- Rogers, C.R. (1978): Do we need "a" reality? *Dawnpoint*, **1**(2), 6-9.
- Rowan, J., & Cooper, M. eds. (1999): *The Plural Self-Multiplicity in Everyday Life*. London: Sage.
- 坂本佑太郎 (2015): わが国の TIMSS2011 数学データにおける多次元 IRT を使った妥当性の検証について 日本テスト学会誌 **12**(1), 37-53.
- Schore, A.N. (1994): *Affect Regulation and the Origin of the Self: The Neurobiology of Emotional Development*. London: Psychology Press.
- Siegrist, M. (1995): Inner speech as a cognitive process mediating self-consciousness and inhibiting self-deception. *Psychological Reports*, **76**, 259-265.
- 城月健太郎・児玉芳夫・野村忍・足立総一郎 (2013): 不安のコントロール感に関する基礎的検討: 社交不安障害の観点から 心身医学 **53**(5), 408-415.
- 田澤安弘・本田泉 (2017): 初回面接前後の状態不安の変化と多面的プリーフセラピーの効果との関連性—インテーク面接へのダイナミック・アセスメントの導入 北星論集 **54**, 73-77.
- 田澤安弘・近田佳江 (2017): インテーク面接におけるダイナミック・アセスメントのためのマニュアルと、ダイナミック・アセスメント後の情動的及び認知的変化に関する単一事例研究 北星論集 **54**, 79-99.
- 田澤安弘・近田佳江 (2018): 私設心理相談室で行う“治療的な”アセスメント—インテーク面接における状態不安のダイナミック・アセスメント 田澤安弘・橋本忠行 (編著) ナラティブと心理アセスメント 創元社 123-142.
- Uttl, B., Morin, A., & Hamper, B. (2011): Are inner speech self-report questionnaires reliable and valid? *Social and Behavioral Sciences*, **30**, 1719-1723.
- Vasilyuk, F. (1992): *The Psychology of Experiencing: The Resolution of Life's Critical Situations*. New York: New York University Press.
- Vygotsky, L. S. (1925): *Consciousness as a problem in the psychology of behavior*. In Velesov, N. (Ed.), (1999): *Undiscovered Vygotsky: Etudes on the pre-history of cultural-historical psychology* (Europaische Studien

- Zur Ideen-Und Wissenschaftsgeschichte, Bd. 8). Bern: Peter Lang. 251-281.
- Vygotsky, L.S. (1933): Проблема возрастa и диaгностика развития. 年齢期の問題と発達診断学 [発達の最近接領域]. 土井捷三・神谷栄司 (監訳) (2012): 「人格発達」の理論: 子どもの具体心理学 三学出版 51-69.
- Vygotsky, L.S. (1934): Мышление и речь. 柴田義松 (訳) (2001): 思考と言語 [新訳版] 新読書社.
- Wells, G. (1999): *Dialogic Inquiry-Toward a Sociocultural Practice and Theory of Education*. Cambridge: Cambridge University Press.

ABSTRACT

**Development of an Anxiety-Soothing Function Scale:
Factor Structure, Reliability and Validity**TAZAWA, Yasuhiro
Hokusei Gakuen UniversityHASHIMOTO, Tadayuki
Kagawa University

The purpose of this study was to develop a scale to measure anxiety-soothing functions (ASF) based on sociocultural theory and to clarify the characteristics of the scale. A questionnaire survey was conducted with undergraduate students (n=218) who had agreed to participate in the survey. Exploratory factor analysis revealed that the ASF scale consisted of three factors: relieving anxiety through self-talk; automatic reduction of anxiety; and internalized positive voice. The Cronbach's α coefficients of the respective factors were 0.833 to 0.854. The goodness of fit of the bifactor model identified using hierarchical factor analysis showed that GFI=0.904, AGFI=0.861, CFI=0.945 and RMSEA=0.060. These values proved reliability and validity of the ASF scale. Subscale score and total score of the ASF scale were negatively correlated ($r=-0.22$ to -0.47) with trait anxiety and state anxiety based on the State-Trait Anxiety Inventory (STAI)-JYZ and positively correlated ($r=0.22$ to 0.34) with the Perceived Anxiety Control (PAC) scale, and revealed that scores were influenced by multiple resilience factors ($\beta =0.164$ to 0.379).

Key Words

anxiety-soothing functions, sociocultural theory, zone of proximal development, reliability, validity